# 「底が突き抜けた」時代の歩き方450

## 「冷酷非道」は我々人間の世界ではないのかー映画『堕天使のパスポート』

北オセチアの学校を占拠した武装集団の遣り口が類例のない「冷酷非道」であることを指弾する声が、メディアから大きく聞こえてきたが、「冷酷非道」であるというなら、最近の紙面で小さく見かけた次のような事例も、十分「冷酷非道」であるといえるだろう。

一つは、イスラエル軍占領下のガザ地区南部で１０月５日、通学中の１３歳のパレスチナ人少女が兵士に射殺された事件である。軍側によってテロリストと誤認されたということだが、この少女射殺事件がこれまでの誤射事件と異なって、常軌を逸した「冷酷非道」な惨事とみなされるのは、最初の銃撃で倒れた彼女を更に至近距離から自動小銃を連発して、小柄な体に１５発もの銃弾を撃ち込んでいたからだ。１０．１７付毎日の報道によると、ガザ地区最南端のエジプト国境に接する町ラファで事件は起きた。

《５日午前６時４５分ごろ、国連パレスチナ難民救済事業機関の小学校に通うイーマーン・アルハムスさんは、学校から４００㍍ほど離れた荒れ地を１人で歩いていた時、イスラエル軍陣地から銃撃された。

「当時は濃霧のため視界が悪く、同時にパレスチナ人居住区方向から銃撃されたため、テロリストの爆弾攻撃と判断、射殺した」。イスラエル放送は軍当局筋の話としてこう伝えた。

だが、証言は食い違う。近くのブロック製造工場から事件を目撃したゾアロブさんは「（当時）霧はなく、視界は良かった」と断言する。かつて宅地や農耕地だった一帯はイスラエル軍のブルドーザーで破壊され、遮へい物はない。

ゾアロブさんによると、最初の銃撃は軍陣地の監視塔付近からだった。イーマーンさんの足元への銃撃で砂煙が上がると、少女はカバンを捨てて走り始めた。途中で足を撃たれ、よろめきながら数十㍍逃げたが、小さなくぼ地に倒れ込み、二度と立ち上がらなかったという。

非情な仕打ちは続いた。少女を追った兵士５人のうち１人が、少女が倒れているくぼ地に向け数㍍の至近距離から自動小銃を連射した。「あの子は既に死亡していた。彼らは死体に銃撃を浴びせたことになる」と、遺体を検視したアルハムス医師。頭や胸、手足など１５カ所以上撃たれていた。

少女はなぜか通学路から外れ、立ち入り禁止区域を歩いていた。しかし、青と白の縦じまの学校の制服を着ていた。逃げる少女に追い打ちをした行為は、常軌を逸しているとしか思えない。事件後、内部告発により、倒れた少女を銃撃したのは中隊長で、部下

の制止を振り切っての行為だったことが判明。軍当局も中隊長の職務を停止し、調査に乗り出した。

「なぜ娘が殺されなければならなかったのか教えてほしい」。少女の父サミールさんは、泣きはらした目で私にこう訴えかけた。無抵抗な子どもが殺され、その真相も十分に明らかにされない。》

内部告発によって事態が明るみに出たことや、イスラエル軍も調査に乗り出したことからも見て取れるように、占領下における治安的な混乱を理由にすることはできない。イスラエル軍からすれば、これまでの自爆テロがパレスチナ人女性によって担われてきた経緯があったために、学校の制服を着た少女であろうとも、警戒心を怠らなかったことは明白である。しかも少女は「通学路から外れ、立ち入り禁止区域を歩いていた」ので、イスラエル軍がより一層警戒心を抱いていたことは間違いない。もちろん、少女が「立ち入り禁止区域を歩いていた」からといって、そのことが射殺される理由になる筈もなかったし、自爆テロが可能となるまでイスラエル軍に接近しているわけではなかった（記事を読むかぎりは）。すると、警戒しているイスラエル軍が少女にむかってせいぜいなしうる職務は、「立ち入り禁止区域を歩いてい」ることを知らせるために、威嚇（いかく）射撃を行うことぐらいであっただろう。

ところが、少女は狙い撃ちされた上に、追ってきた兵士に更にとどめを刺されるように、銃弾を浴びせられることになったのだ。そこには明らかに正当な職務を逸脱する憎悪が認められる。パレスチナ人であれば、大人であろうと子供であろうと、女性であろうと少女であろうと、撃ち殺したい憎悪の念が常にあふれ返っており、目撃者もいないようにみえることと、少女が「立ち入り禁止区域を歩いていた」という些細な違反とが、兵士の憎悪を引きずりだしたようにみえる。最初に撃った兵士が倒れた少女に更に銃撃を浴びせた中隊長と重なるのか、それともその中隊長以外にも歩いている少女を狙って撃った兵士がいたのか、その詳細はわからないが、事件後に内部告発があったということは、兵士の中に少女を撃ったこと自体に後悔を覚えたり、倒れた少女を銃撃した中隊長の「非情な仕打ち」に憤りを感じた者が存在したことを示している。

どこにも落ち度のない１３歳の少女が射殺された上に、彼女の死体に銃弾が浴びせられるという行為が「冷酷非道」であることはいうまでもないとして、「冷酷非道」は少女に対するその蛮行にのみ集中するものではない。というより、真に「冷酷非道」なのは圧倒的な軍事力格差の環境にパレスチナ人が置かれていること自体であり、そしてそのような環境の下で狩猟のようにいつでもパレスチナ人がイスラエル軍に狙い撃ちされる日常性にあるということではないのか。もちろん、イスラエル軍にとってパレスチナ人の少女は自爆テロリストの卵に映っているにちがいなかった。だから、彼らからすれば、少女を射殺することは将来の自爆テロリストの芽を摘むぐらいの意識であったかもしれない。内部告発した兵士にしても、少女を射殺したことへの怒りではなく、射殺した少女に尚も銃弾を浴びせかける中隊長の異常さに反撥しただけのことであったかもし

れない。軍当局による調査もそのような中隊長の行き過ぎを是正する目的であったかもしれなかった。

いまでなくとも、いつか自爆テロをもって刃向かってくるパレスチナ人少女を、そのときではなく、いま撃ち殺してなぜいけないのか、という声がイスラエル軍全体から聞こえてくるし、中隊長からも自爆テロに対する憎悪の念を倒れた少女に銃弾を浴びせるかたちでぶつけて、なぜいけないのかという声が聞こえてくるように思われる。里山からエサを求めて下りてくるクマが人を襲うかもしれないから、見つけしだいクマを「有害駆除」しなければならないという発想が、パレスチナ人少女を射殺するイスラエル軍に貫かれているのがはっきりと認められる。パレスチナ人少女はイスラエル軍にとっては、「有害駆除」されなくてはならないクマに等しい存在であったのだ。パレスチナ人少女射殺事件には、圧倒的な軍事力格差にある環境の下では、劣位の人々は従順であれば家畜のように取り扱われ、抵抗すればクマのように「有害駆除」されるという、どちらにしても優位な人々によって支配され、狩られる関係にあることが浮き彫りにされている。

もう一つの報道（１１．７付神戸）もまた、パレスチナ人少女射殺事件と同質の「冷酷非道」を際立たせている。

《イラクに駐留する米軍の兵士がバグダッド北東部サドルシティーで今年８月、少年らの乗ったトラックを反米勢力と誤認して攻撃、その際に重傷を負った少年一人を射殺していたことが５日、明らかになった。米紙ロサンゼルス・タイムズが伝えた。

兵士らは「助かる見込みがないので楽にするためだった」と主張しているが、米軍は殺人罪の適用も念頭に調査に乗り出した。

同紙によると、サドルシティーを夜間パトロール中だった兵士らは、反米勢力が攻撃を準備中との情報を得て、少年らのトラックを発見、攻撃した。しかし乗っていたのは、日給５ﾄﾞﾙ（約５百円）で夜間にゴミ集めをしていたほとんどが十代の少年十数人で、反米勢力とは無関係だった。

無傷だった仲間の少年らは、負傷者を助けるようたどたどしい英語で懇願したが、米兵のうち軍曹（２９）ら二人が重傷の少年を射殺。この少年を含め７人が死亡し、８人が負傷した。

兵士らは上官に細部を報告せず、その後、内部告発で射殺の事実が明らかになった。同紙によれば、調査の結果軍法会議が開かれ有罪となれば、死刑の可能性もあるという。》

反米勢力と誤認して少年らを攻撃したのであれば、その際重傷を負った少年の命を必死に助けることで誤認の責任を果たそうとするのが、誰にも納得される方法だった。ところが、重傷の少年を射殺したというのである。この少年以外に６人が死亡しているのは、最初の攻撃によるものと考えられるが、パレスチナ人少女の射殺といい、このイラク人少年の射殺といい、それらの事件にみられる「冷酷非道」ぶりは、単に戦時下での敵対し合っている関係にあったということだけで説明できるものではない。少女射殺事件ではイスラエル軍は、パレスチナ人と和解しようという気持ちが皆無であることを物

語っていた。イスラエルにとってパレスチナ人は完全に屈服させるか、それができなければ抹殺するか、それ以外の方法はない相手で、共存を模索する相手とみなしていないことは、少女射殺によって明白であった。

パレスチナ人少女は自爆テロリストの卵であるかもしれないと同時に、イスラエルがパレスチナ人に真正面から向き合って共存の途を模索する際に、互いに手を取り合わなくてはならなくなる大切な人材の卵であるかもしれなかった。しかし、イスラエル軍は一方的に少女を自爆テロリストの卵と断定して、射殺するに至ったのである。それによって共存の途の模索も共に射殺されたことになり、パレスチナ人の子供たちも自爆テロリストの途を選択する以外になくなったといえよう。イスラエル軍の圧倒的な軍事力攻撃がパレスチナ人の貧相な自爆テロを引き出しているのであって、逆ではけっしてありえないことは見据えておかなくてはならない。このことは、イスラエルが圧倒的な軍事力をもってパレスチナ人に向き合うことをやめ、先祖代々の土地を奪われ占拠されたパレスチナ人の身になって考えるようになったとき、弱者の攻撃としての自爆テロは止むということを告げている筈だ。

イラクでの米兵による少年射殺事件についても同じことがいえる。本来的にはフセイン政権に拘束されていたイラク人を米国流の「自国と民主主義」にむかって解放しようとするアメリカ側の意図からみれば、イラク人少年はその「自由と民主主義」の重要な担い手でなければならなかった筈だ。つまり、戦争状態にあっても、いや、戦争状態にあればあるほど、直接の交戦相手ではありえない少年たちを「自由と民主主義」の側に引きつけておく必要があった。そうでなければ、イラクが米国流の「自由と民主主義」国家へと再建される筈がなかった。米兵が重傷少年を射殺した行為は、もちろんフセイン政権崩壊以降も打ち続く戦争状態によって、米国流の「自由と民主主義」に不信感を抱きはじめたイラク人をますます反米へと追いやるだけのことであった。「自由と民主主義」の理念を掲げる国の兵士が「自由と民主主義」に反する「冷酷非道」な行為をする筈がないというイラク人の当初の思いは消え去り、国は「自由と民主主義」の理念を掲げていても、米兵の一人一人が必ずしもそのような理念を抱いて戦っているわけではないことを彼らは覚りはじめたにちがいない。

一人一人の米兵が「自由と民主主義」の理念を掲げる国家を裏切ったわけではない。おそらく彼らは国内で日常的に過ごしてきているそのままのありかたにおいて、国内からイラクへ移動してきているにすぎなかった筈だ。したがって、彼らの戦場での蛮行が米国が掲げる「自由と民主主義」の理念に反しているともし非難するのであれば、彼らは国内で日常的に過ごしているときにも、「自由と民主主義」の国家理念が生活のなかに体現されていないといって非難されなければならなかった筈である。選択不可能な戦争の極限状況下に兵士たちが置かれているが故に、彼らは国内で平穏に過ごしていた自分と切断された全く異なる人間へと変貌し、「冷酷非道」な行為に着手するようになったとは思われない。おそらくそうではなく、戦争という極限状況下に放り込まれるや、

国内での日々の生活の中ではけっして先鋭化されることのなかった「冷酷非道」が、極限化されて引きずりだされてきたのではなかったか。

戦争状態のなかで「冷酷非道」な行為として突出するような日々の日常生活を、我々は送っているのではないか、と思われてならない。戦争になると人間は突然「冷酷非道」な仕打ちを行うようになるわけではなく、戦争にならないと大きく迫り上がってこないような「冷酷非道」な日々を我々は過ごしてきている筈である。戦争は我々の日常生活に底流している「冷酷非道さ」を大きく引きずり出してきただけではなかったか。イスラエル人にとって自爆テロを行うパレスチナ人がいくら憎悪すべき相手だったとしても、自分たちに危害が及ばない離れた場所を歩いているパレスチナ人少女を狙撃するには、兵士たちが日頃機会さえあればパレスチナ人など全員射殺してしまえ、と思いながら日常生活を送っているだけでなく、気に入らない小動物を無意味に迫害したり、殺傷するような習性が身に備わっていなければならなかったのではないか。米兵が誤認攻撃して重傷を負った少年を射殺するというようなことが起こるのも、戦争のせいで兵士らが狂ったわけでもなんでもなく、彼らは機会さえあれば、いつでも「冷酷非道」が露わになる日常生活を送ってきていたということにほかならない。

パレスチナ人少女射殺事件や、米兵による重傷少年射殺事件が明るみに出たのは、いずれも内部告発によってである。内部告発が起こるのは、いくら同じ味方であっても、彼らの遣り口はあまりにも酷すぎるという義憤に駆られる兵士が存在していたからである。つまり、内部告発者は同じ軍服を着ている兵士の関係であっても、いや、そうであるからこそより一層、自分が彼らと一緒ではありえないことを明白にしたかったのであろう。では、内部告発する者とされる者とを決定的に分け隔てているものは一体なんであったのか。いうまでもなく平然と少女や少年を射殺することができる者と、その行為に嫌悪感を抱く者との差であろう。内部告発者が人間として許されないことがあるという倫理観を持っていたのに対して、内部告発される側にはその倫理観が全く欠如していたとみなされる。その倫理観はもちろん、敵味方を超えてどこまで相手の身になって考えられるか、ということと密接にかかわっていたにちがいない。

イラクのアブグレイブ刑務所で行われていた収容者拷問事件が明らかにされたのも、内部告発者が存在していたからである。軍隊には軍隊の倫理観があり、その主要な一つが、「どんなことがあっても仲間を売るような卑怯なことはしてはならない」というものであった。戦場で敵とたたかう味方同士にとって、この倫理観は兵士が友情と連帯を誓う最大にして、不可欠な道徳原理であったとみなされる。背後から」味方を撃つような輩が現れるなら、敵との戦闘どころではなかったからだ。しかし、「どんなことがあっても」という仮定が無制限である筈がない。「仲間を売る」という次元を超えたところで、人間として許されないことがあるし、座視するという「卑怯なことをしてはならない」ということがありうる。おそらく内部告発者は味方や仲間といった次元よりも、人間であるという次元を優先させて、たとえ仲間外れや内部批判に晒されるようとも、

自分が正義だと信じる方向を目指して生きようと覚悟したのである。
　戦場であろうとなかろうと、「人間とはなにか」という問いをたえず念頭に置いて、自らの歩行を考えている者であれば、無抵抗であったり、重傷を負っていたり、子供や女性であったりする相手に戦場の中で遭遇した際に、手を差し伸べることはあっても、「冷酷非道」な振る舞いに及ぶことはないと確信される。なぜなら、彼は「冷酷非道」に自分が陥らないようにたえず心掛けて生きているだろうからだ。裏を返すと、戦場で「冷酷非道」に振る舞える者は、戦場でなくても「冷酷非道」に振る舞えるにちがいなかった。彼にはどのような場所であろうとも、人間として行ってはならない仕打ちに対する倫理観が欠如していたからだ。倫理観の欠如は相手に対する優位的な関係の中で、最大に「冷酷非道」なかたちをとって発揮されるといってよい。自分より貧しい者や劣位な環境に置かれている者や、人間よりも下位にある（と考えられている）動物に対して、要するに、本来であれば手を差し伸べなくてはならない相手に最大の残酷さをもって報いようとするのだ。
　チェチェンや北オセチア、パレスチナやイラクなど、世界の戦争地域で報道されたり、されなかったりする数多くの「冷酷非道」な行為が、戦場に特有のおぞましい事態ではけっしてなく、その「冷酷非道」は戦場とは遠く掛け離れているようにみえる我々の一見穏やかな日常性に深く巣くっているのではないか、と考えさせるのは、映画『堕天使のパスポート』である。この映画で描かれている「冷酷非道」な世界は、戦争地域で露わになっている「冷酷非道」であることによって、我々の日常性も一皮剥けば銃弾や砲撃が目にみえないだけの戦場にほかならないことを改めて気づかせる。非日常性の戦場で頻発する「冷酷非道」は、日常性というものが非日常性の集積によって成り立っていることを考えるなら、日常性の細部で火花を散らしている「冷酷非道」と円環しているのが浮かび上がってくる。
　映画『堕天使のパスポート』は、イギリスに数多くいるとされる不法滞在者の闇の生活に焦点を当てた作品であり、フランス映画『アメリカ』で注目を浴びたオドレイ・トトゥが主演している。監督は『がんばれ、リアム』のスティーヴン・フリアーズである。
　ヨーロッパの他国やアフリカ大陸からパスポートを持たずにやってくる不法滞在者や難民たちがひしめくロンドンが、舞台になっている。母親が味わってきている抑圧された生活から逃げ出すために、トルコからやってきたシェナイ（オドレイ・トトゥ）は、従姉妹のいるニューヨークへ脱出する日を夢見ながら、小さな二流ホテルのメイドとしてつつましく暮らしている。彼女はオクウェ（キウェテル・イジョフォー）というナイジェリア人と同居しているが、愛人関係ではなく、同じホテルにシェナイは昼間勤め、オクウエは夜勤係で、しかも昼間はタクシーの運転手をしているために、二人は昼と夜とすれ違いで同じアパートを使っていたのである。
　ある夜黒人の娼婦ジュリエットの知らせでホテルの部屋をチェックしに行ったオクウェは、トイレの便器の中に切り取られた人間の心臓を見つける。彼はジュリエットから、

ホテルで臓器売買が行われており、貧しい難民たちの臓器が素人の手で取り出されるため、売り手がしばしば死んでいることを聞かされていたのだ。彼はその臓器を手に支配人に警察に通報するように言うが、支配人は全く取り合わず、「見たことを忘れろ」と口封じの金を握らせようとする。オクウェはその金を拒むが、不法滞在者の彼には自身で警察に通報することはできなかった。しばらくしてオクウェの存在を嗅ぎつけた移民局の男たちが、シェナイのアパートを捜索するが、オクウェは間一髪逃げ切る。政治亡命による難民であるシェナイは部屋を貸すことができないだけではく、、最低半年は働くことも禁止されていた。移民局に目をつけられた彼女は、この事件でホテルを辞めざるをえなくなる。

シェナイは友人を頼って安い給料で縫製工場で働きはじめる。しかし、そこも移民局につきとめられ、上司から口止め料の代わりに性的な奉仕を強要される。処女性を重視するイスラムの戒律に忠実に従って生きてきた彼女にとって、それは屈辱以外の何物でもなく、遂に我慢しきれず工場から逃げ出す。他方、オクウェは口止め料を拒否したことと、通常の難民とは異なる知的な雰囲気を備えていることを訝(いぶか)った支配人によって、その素性を突き止められる。祖国で反体制派の医師であった彼は、妻殺しの容疑で国際指名手配されていることがわかる。支配人はオクウェが医師であることを知って、彼にその口止めと他国への脱出のための偽造パスポートの入手の条件と引き換えに、臓器摘出の話を持ちかける。窮地に立たされた彼は迷いつつも断るが、彼の逡巡を見透かした支配人は、彼がその気になるのを待とうとする。

シェナイがホテルを辞めることによって住み処を失ったオクウェは、中国難民の友人が薄給ながら公式に守衛として勤める病院の霊安室に屍体と一緒に寝泊まりしていた。縫製工場を飛び出したシェナイは、そんな彼のもとに駆け込んでくる。自分のせいで彼女に辛い目をさせていることに負い目を抱いていたオクウェは、彼女を助けようと奔走する。そんな彼の必死の姿にシェナイは愛情を抱くようになり、自分と一緒にニューヨークへ行こうと誘うが、オクウエは祖国で自分の子供が待っていることを話して、「バカげた夢から覚めろ」とシェナイを突き放し、チャイナタウンにある友人の従兄のアパートにしばらく住むように言う。オクウェが妻帯者であることを知ったシェナイはオクウェと別れ、チャイナタウンには行かなかった。追い詰められた彼女は一刻も早くこんな生活から抜けだして、従姉妹の住むニューヨークに行ける偽造パスポートを入手するために自分の臓器を売る決心をする。

シェナイは元の勤務先のホテルに出向き、支配人と会って、パスポートの入手と引き替えに肝臓摘出の手術を申し出る。命の危険が伴うが、もしもホテルから無事に生きたまま出られれば、新しいイタリア国籍を得て晴れてニューヨークへ渡ることができるという真剣な思いに切羽詰まっている彼女の弱みに付け込んで、支配人は彼女の処女を奪ってしまう。シェナイの行き先を探していたオクウェは、彼女がホテルに出向いて自分の臓器を売ろうとしていることを知る。何があっても、シェナイを守り抜くことを固く誓

って、彼はホテルに駆けつけ、支配人にシェナイの臓器摘出手術を行うことを引き受ける。大喜びの支配人は二人分の偽造パスポートを買うだけの金をオクウェに約束する。彼は娼婦のジュリエットと中国難民の友人の協力を仰いで、ある計画を実行に移そうとする。

医師であるオクウェは手術を万全に行うために、友人の病院から手術器具や薬品を入手し、手術が行われるホテルの部屋を衛生を保つために手術室へと模様替えする。部屋にやってきた支配人は「さすが、元医者！」と感嘆の声をあげ、オクウェの医者としての経験に満足感を示す。オクウェは支配人に手術の助手を頼み、手が震えないようにと睡眠薬入りのビールを飲ませる。彼はシェナイの肝臓摘出ではなく、支配人の肝臓摘出を行う計画を立てていたのだ。摘出した支配人の肝臓をスポンサーに届け、オクウェとシェナイは金を手にする。これでシェナイは憧れのニューヨークに飛び立てるし、指名手配中のオクウェも偽造パスポートで帰国して子供たちに会うことができるのだ。二人がロンドンの空港で別れる時に、シェナイが支配人から聞かされていた妻殺しのことを聞くと、オクウェは体制によって妻が殺され、その冤罪を負わされていることの真相を告げ、安心したシェナイは彼にニューヨークの従姉妹の住所を記したメモを手渡す。二人は別れ、オクウェは空港の公衆電話から娘に電話し、「待たせたね、これから帰る」と告げて、映画は終わる。

この映画の中で、シェナイとオクウェの二人の男女は、シェナイがオクウェを慕う素振りを見せつつも、最後まで抱擁するシーンもなければ、「愛」という言葉を口にするシーンもない。シェナイがもし本気でオクウェのことを愛していたなら、ナイジェリアの娘のところに帰ろうとするオクウェにシェナイが付いていくことも考えられたし、またオクウェにシェナイの今後の運命まで引き受けようとする気持があったなら、シェナイが飛び立とうとするニューヨークにむかって、オクウェが子供を連れて同行することも考えられないわけではなかった。もちろん、シェナイが別れ際にニューヨークの住所のメモを渡したことで、二人の将来の再会が暗示されていたが、それはあくまでも暗示であって、二人が今後どう交わるのか、交わらないのかは二人にもわからなかった。

少なくとも映画では、二人が別々の方向に飛び立つことで終わったのである。いや、終わらなければならなかったのだ。それは、不法滞在者としての彼らが直面した現実が、あまりにも「冷酷非道」であったからだ。二人は巧妙に「冷酷非道」な現実から逃れられた（かにみえる）が、無数のシェナイや無数のオクウェが不法滞在者として、映画の舞台であるロンドンに、そして世界中のネオンがきらめく大都会に隠花植物のようにひっそりと息をひそめている現実があった。オクウェがシェナイにむかって「バカげた夢から覚めろ」と突き放すように言ったのも、不法滞在者である自分たちはいつ強制収容されて、本国へ強制送還されるかもわからない現実に置かれていることを忘れるな、と忠告していたのだ。「バカげた夢」を見ることが命取りになることを諭していたのである。現にニューヨークに飛び立つための偽造パスポートを入手するために肝臓の摘出を決意したシェナイが、オクウェではなく素人の手にかかっていたなら、命を落としてい

たかもしれなかったのだ。
　映画はシェナイとオクウェの関係を描きながら、不法滞在者が置かれている「冷酷非道」な現実に焦点を当てていたのである。その残酷な現実から抜け出てくる二人のハッピーな将来を見据えているわけではなかった。とりあえずは巧妙に偽造パスポートを入手して将来への一歩を示しつつも、彼らがどこかの新天地に向かおうとも、偽造パスポートを必要とする「冷酷非道」な現実の中に埋め込まれていることを示唆していたのだ。だから、彼らは二人だけの関係に閉じこもることはできなかった。それぞれが抱え込んでいる現実の中で、それぞれにとっての進路に向き合う以外になかった。不法滞在者であるが故に「冷酷非道」な現実の中に埋め込まれたまま、将来にむかって一歩を踏み出す以外になす術のない二人の現実を描くことによって、映画はどの新天地に飛び立つこともできない不法滞在者の「冷酷非道」な不条理を迫り出させていた。
　その「冷酷非道」な不条理を際立たせている印象的な場面がある。オクウェが元医者であることを知った支配人は、臓器摘出の手術の執刀を引き受けるようオクウェを脅し、彼をホテルの一室に案内する。そこでオクウェは不法滞在者である黒人女性から、手術執刀を必死に懇願される。動揺するオクウェに横から支配人が、彼女は偽造パスポートを手に入れるために命懸けで頼んでいるんだ。助けてやろうとは思わないのか。元医者のお前の腕なら、彼女の命を救ってやれるかもしれない。だがお前が拒否して、他の素人同然の奴が手術をするなら、彼女の命が助かる確率は低くなる。彼女がこんなに頼んでいるのに、お前は彼女を見殺しにするのか。お前がやれば、彼女は助かる。それが医者っていうものではないのか。お前が頑固に拒否しつづけるなら、彼女の命は助からんぞ、それでもいいのか、と脅す。臓器売買に嫌悪感を抱くオクウェは、黒人女性の懇願と支配人の脅しを振り切って部屋を飛び出す。
　オクウェが直面している「冷酷非道」は、不法滞在者として摘発されることをたえず恐れながら日々をすごさなければならない現実ではない。また、そんな息苦しい生活から逃れるために、新天地を夢みて偽造パスポートと引き換えに死ぬ覚悟で自分の臓器を売ろうとする現実でもない。いまここの生活から抜け出すためには自分の臓器を売るしかない、不法滞在者としての八方塞がりの現実そのものが「冷酷非道」なのである。医者としての倫理観からオクウェが臓器摘出手術を拒否するのは、当然であった。しかし、素人の手で臓器摘出手術が行われれば命を落とす確率が高くなるのを、オクウェが引き受けるなら命が助かる確率が高くなるのも明白であった。オクウェがもし手術台に上る不法滞在者の命をできるだけ救おうとして手術を引き受けるなら、彼は紛れもなく臓器売買という、医者としてだけではなく、人間としても許されない悪徳に加担することになってしまうのだ。
　いうまでもなく臓器売買は、摘出された臓器が他の患者に移植されることが可能となるだけの近代医学の発達を前提とせずには成り立たないし、その前提に立って人間の臓器が商品として売買される市場が存在しなくてはならない。買い手があって売り手が存

在し、買い手と売り手を仲介する業者が登場するのは、商品流通（売買）の原則である。不法滞在者に売るものがなければ、摘発される日々の生活に甘んじていなければならなかった。したがって、新天地を夢みることもなく、偽造パスポートなど全く無縁の世界であった。ところが、自分の臓器が偽造パスポートを入手するだけの金で売れる（時代である）ことを知ったのである。もちろん、不法滞在者としての生活がそれなりに居心地がよければ、運が悪ければ死ぬことも考えられる危険な臓器摘出手術を受けることなどありえなかっただろう。不法滞在者の生活が最悪であったなら、そこから抜け出すために自分の臓器を売ってでも、そして命を落とすことがあっても、夢に賭けようとするのは不可避であっただろう。

映画パンフによれば、難民は１９５１年に制定され、８１年に日本が批准した国連難民条約によって、「人権、宗教、国籍、政治的意見や特定の社会的集団に属することを理由に、自国にいると迫害を受ける十分な恐れがあるために他国に逃れた者」と定義されている。《とはいえ、難民が申請に至る理由は個々様々だ。出身国の政治状況を調査し、国を出た背景について通訳を交えながら本人の話を聞くなど、入国管理局は個別に細かい審査を行う。それには時間も必要で、イギリスでは結果が出るまで半年以上かかるケースも珍しくない。命からがら辿り着いた人々にとっては理不尽な対応だろうが、どの国もお金を稼ぐために働くことを目的とした、俗に言う経済難民に対する神経を尖らしているのだ。／経済難民でなくとも、貧困や内戦から逃れるために自ら進んで祖国を離れた人々は移民であり、現在の条約上では保護すべき対象とは認知されていない。強盗や殺人といった罪を犯して国外脱出した者も然り。本作の主人公オクウェが難民申請をせず不法滞在者として留まっているのは、濡れ衣とはいえ母国で殺人犯扱いされている以上、難民と認定される可能性が低いと踏んでいるからだろう。》

イギリスの難民政策については、こう説明されている。《EU 内での難民申請は最初に到着した国ではなく、自分が申請を希望する国に到着した時点で告げればいい。ヨーロッパには年間４０万人を超える難民が庇護を求めてやって来るが、イギリスは難民にとって特に魅力のある国とされており、これまで数多くの申請希望者が上陸を目指してきた。／イギリスで難民申請を行えば、認定審査の期間中は毎週生活費が支給され（中略）、場所は選べないが住居が無償で提供される。申請後も６ヶ月を過ぎれば、審査期間中であっても働く許可が下りる。イギリス国民と同様、医療は無料。そして他の欧州諸国にはある ID カード制度がイギリスには存在しないからであった。》因みに毎週の生活費支給額は、カップルで６０．０３ポンド（約１１２２６円）、２５歳以上の単身者で３８．２６ポンド（約７１５５円）、１６歳以下の子供で３８．５０ポンド（約７２００円）、年齢や配偶者の有無によって現在６区分されている。

《しかし、増加する難民に税金が使われることへの国民の反発、難民を装って制度を悪用する移民が少なくないことから、難民に関する法律や処遇は年々厳しくなって》おり、その結果、《イギリスの入国管理局が発表した２００３年１～９月までの難民申請は約

３８５４０件（配偶者は除く）。２００２年１年間の総申請者数が約１０万人だったことを考えると、その数が大幅に減少していることが分かる。その一方で、他のヨーロッパ諸国における申請者数は増加。ヨーロッパ全体における難民総数はさほど減っていないそうである。／イギリスの統計では、難民申請者の多くはジンバブエ、ソマリア、イラク、アフガニスタン、中国の出身者。約１０%が１８歳から２４歳の単身者、７．７%が２５歳以上の単身者で、１７歳以下の子供も６%を占めている。また、２００１年中の申請を含め、２００２年に出た審査結果は計８３５４０件。そのうち人材的配慮も含めて滞在が認められたのは２８０００人程度と発表されている》ということは、低く見積もっても５万５、６千人程度が不法滞在者になっていることになるだろう。
《２００３年９月、偽造パスポートでイギリス・ヒースロー空港への入国を試み摘発された人の数が、毎月約４００人いるとの統計が発表された。／日本のパスポートと同様、EU 加盟国発行のパスポートの信用度は非常に高い。多くの外国へビザなしで渡航できるし、EU 域内の移動であれば互いのパスポート・チェックは簡素で済む。不法労働を目的に各国への入国を目指す者にとって、国境を楽に越えられるという利点は何物にも代え難い。偽造パスポートを買うことは、未来のための投資に等しいのである。テロリストにとっても、疑われることなく履歴も残さず移動するためには偽造パスポートが不可欠だ。また、公的身分証明書としての利用価値も高く、例えばマネー・ロンダリングのための銀行口座の開設、家を買ったり借りたりすることが可能となる。》イギリスで売買されている最高品質の偽造パスポートは７千ポンド（約１３１万円)、身分証明書として通用する程度のものは６百ポンド（約１１万２千円）の超破格値で登場しているという。
　不法滞在者が臓器売買の供給源になっているという問題は、徴兵制が廃止されて志願兵へと転換した米国で、慢性的な失業状態に見舞われている若者たちが戦場へ送られていく末端兵士の供給源になっているという問題と、同じ構造に貫かれている。どちらも死の領域に片足を突っ込むことによってしか、将来の夢をみることも生きることもできないのだ。「冷酷非道」なのは将来の生活につながっている偽造パスポートを入手するために、窮地に陥っている不法滞在者が自分の臓器と引き換えにせざるをえなくなっていることであるよりも、死に直面するかもしれない不法滞在者の臓器が売買されていくことで成り立っている世界であるにちがいない。つまり、人間というものの値打ちが臓器の値段で測られることによって、自分の臓器の値段ほどの値打ちを自分という人間が持ちえなくなってしまっている状態に置かれていることが、「冷酷非道」なのだといえよう。このことは、値段の付く臓器の集合体にまで解体されている人間は、人間の食料として家畜化されている動物の解体の延長線上に位置づけられることを、そして戦争地域での「冷酷非道」な振る舞いが、人間が人間として取り扱われなくなっていく一般社会の日常性に巣くう「冷酷非道」が基盤になっていることを物語っているにちがいない。

２００４年１１月２２日記